墓前の花

そして今

奥村輝夫は駿河小山から２４６号線を東に向かって走りながら、疑惑と困惑と、何がしかの期待のなかにあって、ともすれば運転を間違いそうになるほど興奮していた。道は幾重にもくねって谷や集落を通り過ぎる。不可思議な現象、幻覚でもないかぎり理に合わないことはこの世には存在しないはずだ。ハンドルさばきに注意しながら頭の中はさっき見てきた理解しがたい事実の解明に集中していた。

彼はいま、富士を望んで風光明媚と宣伝されている霊園に眠っている妻の墓地に出かけて不思議な光景を目にした。妻、道子は一年半前に亡くなっていたが、定年後六年もすぎて、もてあますほど閑のある彼は、ほとんどの時間を使って秋子の追悼に費やし、月命日にもせっせと往復三時間の道のりをさほど遠いとも思わずに墓参りをするのが習慣になっていた。信仰心があるわけでもなく、むしろ普段霊魂を否定するような言動が多いのに、理屈とは別に、妻のもとに引き寄せられていくのは本能的な行為であろう。人は己の抱いている思想と日常においてとる行動とは一致しない人が多

い。彼もその一人で、「死ねば無」という言葉は軽々と口から出るが、骨壷が置かれているだけの、無機質な廃墟の墓地にせっせと足を運んで、墓石に水をながし、洗い清めることの矛盾に気付かぬふりをしているだけなのか、それとこれとは別、と考えているせいか、ともかく追悼的な儀礼は日常化していた。生前、そんなに妻を愛していたのか、儀礼に集中していると、一途に愛していたような錯覚に陥る。喪ってみてはじめて大切さがわかるというが、かけがえのない宝物をなくしてしまったような喪失感に捕らわれて、日々大げさに妻への思い出をかき立てていた。

その広大な霊園は何万という同じ大きさの墓石がいっせいに極楽浄土の西方をむいて整然と並んでいる。墓地の間をぬって送迎バスが走っているほどの広い公園墓地なのだ。彼の妻の墓はその一画の、五，六基ほど横に並んだ通路とは反対側の土手に近い側にある。

入り口の事務所で花を買い、(彼は白い花が好きだった。例えばマーガレットのような) バケツと柄杓をもって墓所へと回りこむ細い道の手前で車をおりた。十一月の透明な青空が何処までも高く、紅葉しかけた落葉樹が映えていた。妻の墓地の前まで歩いて行ってふと違和感をおぼえ、場所を間違えたのかと思った。墓の管理費に一万円

ほど上乗せすると狭い敷地の回りにベゴニアを植えて手入れをしてくれる。ベゴニアにかこまれ、「わが愛する人此処に眠る」と刻まれた墓標はまぎれもなく妻、道子のものである。しかし、墓石の両側におかれた花筒に、秋の花束がたわわに飾ってあるではないか。花はまだそんなに痛んでいない。三、四日まえぐらいに置かれたものと思われる。彼が一ヶ月前にやってきて飾った花は当然枯れて、管理人が片付けてくれているはずである。彼は自分の買ってきた花と見比べた。人工的な菊やカーネーションなどと違って、すすき、おみなえし、竜胆など秋が匂い立つような花束であった。

墓石に水をかけることも忘れてしばらくぼんやりと立っていた。誰がきてくれたのだろう。おもいあたる人は浮んでこない。もう亡くなって一年半も過ぎている。車が無ければかなり不便な丘の中腹である。いや車でも都心からは三時間以上かかるだろう。何万基という同じ形の墓石の並ぶこの公園墓地で、目的の墓を探すのは輝夫のように毎月訪ねてくるものにとっても迷うことの多い場所なのである。こんなところに、薄ら寒い十一月の初冬の季節に一体誰が墓参りをしてくれたのか――。しかも夫である彼には全く知らせることも無く。

とにかく彼は自分の持参した花束を秋の花と一緒にして花筒に押し込んだ。花は窮

屈そうに、しかし一層の華やかさを漂わせ、妻の墓所を賑やかなものにした。線香は匂いが嫌いなので使ったことはない。一礼して改めて周りを見回した。

知人の墓を探していた誰かが目的の墓を探しあぐねて、手持ちの花を勝手に適当な場所に飾って帰っていったのだろうか。しかし、妻の墓は通路際ではない。わざわざ土手に近い奥の方まで歩いてくるだろうか。他人の気まぐれだと思っても疑問はのこる。

それでも誰かの手によって道子の墓に季節の花が飾られていたことは悪い気がしなかった。万が一、妻には自分に内緒の恋人がいて、妻の死を悲しんだ恋人が、ひそかに墓前に花をたむけたのだろうか――。いやいや、妻はそんな女ではないはずだった。家庭の中に閉じこもって、家事だけに熱中しているような内向きの女であった。男の影なんて想像さえできない。いつもは霊園のなかを散歩して方々の墓碑銘を読んだりするのが楽しみであったが、彼の頭は混乱し、一体何処の誰が……という好奇心と困惑でぐるぐると回転していた。もしかしたら、と思える親戚、知人の顔がうかぶ。しかし祥月命日ならともかく、平日に霊園まで足を延ばしてくれそうな律儀な顔は頭にうかばない。電話で心当たりを確かめてみようと思いつき、彼はせかせかと車に乗り

込んで帰途についた。
帰宅早々に、多摩の団地に住んでいて、共働きで貯蓄したおかげで比較的優雅な老後を暮らしている道子の姉夫婦に聞いてみる。
「まあお花が？墓地に？私もご無沙汰ばかりしているから行きたい気持ちはあるんだけれど、何しろ腰が痛くて思うように歩けないのよ。誰でしょうね。本当にありがたいことねえ。この寒いのにおまいりしてくださるなんて、道子も喜んでいるでしょうよ」姉は甲高く言って感謝の言葉を並べて誰か知らない人にお礼を言った。あまり疑問に思っている様子はなかった。まして道子の性格からして、ひそかな人がいたのではなどと、思ってもみない風であった。本当に親しい間柄ならともかく、通り一遍の人に対して、墓参りをしてくれたのかと押し付けがましく聞くのも気がひける。彼の妹や、親しく付き合っている従弟など、三、四人に電話をしてみな否定されたとき、気持ちが萎えてしまった。
ありえないこととは思っても空想は同じところを堂々巡りする。妻にはお互いの家族に内緒の愛人がいて、道子の死によって輝夫と同じような悲しみに浸っている人が、人知れず秋の霊園を訪れて、花を飾っていったという妄想。彼の手をとって喪失を味

わっている者同士、感謝の気持ちを伝えたらと、あれこれロマンチックに想像していた自分がばかばかしく思えてきた。それどころか、彼が見たあの花は、妻道子の幻影ではなかったかとさえ思われて、本当にそこに花があったのかさえ、自信がもてなくなった。世の中、いろんなことが起こりうる。理不尽な事があってもいちいち驚いていては神経が磨り減ってしまう。一時はあれほど興奮した「事件」であったのに、彼は忘れようとした。見知らぬ花が妻の墓石に飾ってあったとて何ほどのことでもない。見知らぬ人が妻の墓に参ったとしてもそれが一体なんであろう。気使うほうがおかしいのだ。寝苦しい夜、布団を頭まで被って輝夫は忘れることにした。

一年半前

一年半前、奥村道子は癌を患ったにもかかわらず、あまり苦しまずに逝った。覚悟はしていたが現実を受け入れかねて輝夫は再び目を開けることのない道子の冷たい頬をしばらくの間なでていた。死の床に少しばかりの親戚が集まった。

通夜と葬儀は簡素なものであった。地元の出身でもなく、郷里ははるか遠い瀬戸内海に面した小都市である。子供はなく、夫婦の兄弟や甥、姪は近県にほんの十人程度

が点在しているだけであった。近所の斎場の一番小さな部屋を借り、生花を飾っただけの簡単な祭壇の前で、無名のチェロ奏者にお願いして、レクイエムなどを一時間ほど演奏してもらった。「音楽葬」という思いがあった。中年の無口なチェリストは丁寧に一曲ずつ弾いて拍手には深々と頭を下げていた。

読経ははぶいた。顕花をした参列者は小さなテーブルに用意したサンドイッチやクッキー、紅茶やコーヒーなどをつまんでくつろいでもらい、故人の思い出を語ってもらった。香典は辞退した。チェロの曲はもの悲しく、「千の風になって」という大空を吹き渡っている死者の魂に触れたとき、彼はぐっしょりと涙で濡れた顔を恥じた。「しっかりしろ」兄が傍に来てささやいた。妻との五十年に及ぶ共同生活の思い出が走馬灯のように巡っていく。夫が泣くのに何を恥じることがあろう。やせ衰えた顔を美しく化粧して棺のなかで妻は眠っていた。

「道子さんは本当にご主人一辺倒でしたものね」

「いまどきあんなによくご主人に尽くした人も珍しいわね」

「皆で遠出をしても彼女一人、主人が待っているからと先に帰ったものよ。食事の用意をするんだって」

「本当に仲のいい御夫婦だったわ、これから御主人は一人になってたいへんね」
「ほらごらんなさい、泣いていらっしゃる」
道子の仲間とおもわれる四、五人のグループの女性たちが、ちらちらと彼の方を盗み見しながら聞こえそうな声でおしゃべりをしている。彼はそそくさと棺のそばを離れ、窓際にいってもたれた。
　彼はふと参列者を眺めた。親戚のものたちは一塊になって、御無沙汰の挨拶を交わし、昔の思い出や、鬼籍にはいったあれこれの先祖の話題に夢中になっている。定年後も一緒に旅行をしたり飲んだりしている気のおけない友人が三、四人、無言でたちつくしている。さきほどおしゃべりをしていた妻の交友関係に関しては全く関心がなかったので誰一人名前を知っている人はいなかった。
　いかにも借り物といった、身丈にあわない黒のスーツを着た背の高い、若い男性がポットから紅茶をそそいで飲んでいた。誰とも会話を交わすことがなく、一人で参加したようであった。彼は一寸の間、その男性に目をとめた。細い指が優雅にカップの取っ手をつまむのをみた。たまたま傍を通りかかった姪の静子に「あの人、だれだろう」と尋ねた。静子は立ち止まってしばらく若い男性を無遠慮に見つめていたが、か

すかに首を横にふった。
「わかんない、道子おばさんは公民館でなにかやっていたみたいだからその関係の人じゃないの。どなたか、聞いてみましょうか」彼はいやいやと大きく首をふって、「おそらく道子の知り合いだろう。わざわざ出向いてくれて、ありがたいことだ」とつぶやいた。若い男性は視線を感じたのか、二人に近づいてきて頭をさげた。
「このたびはご愁傷様です。近くで拝ませていただき本当にうれしかったです。ありがとうございました」。
低い声でしかし、しっかりと挨拶をして彼は受付で参列のお礼の粗品を受け取ると、玄関の灯篭に一瞬姿を浮かび上がらせたが、すぐに木立の影に消えていった。いまさらどなた様で、とも聞けず、彼は深く頭をさげて見送った。参列者の名簿に名前はなかった。香典をいただいていないのだから強いて書く必要もなかったのである。
　輝夫は茂った木立からもれる遠くのネオンの明かりを見つめながら、これからの道子のいない毎日を思っただけでめまいがした。

三年半まえ

燃え立つような緑の季節。さらに二年前にさかのぼる。
安藤高志は、綺麗に拭き清められた六セットの椅子とテーブルの位置を正し、その上の小さなガラスの花器にそれぞれ赤い薔薇の花を一輪飾り、室内を見渡して落ち度のないことを確認して、どっしりした木彫りのドアをあけ、銅板に「シャンテ」と花文字でかかれた店の名前の下に、「オープン」のプレートをかけた。
カウンターのなかに入って食器をチェックする。汚れはないか、ひびがはいってはいないか。グラスは磨かれているか。ランチタイムは価格を安く設定してあるので女性には人気がある。昼時、いつもせまい室内は満席になる。十一時半の開店時間から客はすこしずつ入ってきた。ほとんどが主婦だ。彼女たちの、汲めどもつきぬ泉のような話題は次々と溢れて店内は活気をおびてくる。
レストラン「シャンテ」はすぐ傍に大学の付属病院があるので地の利を得ていた。胃腸が丈夫で食欲に異常がなく、検診の結果を確かめにくるような病人や、見舞客が、帰りに寄って昼食をとっていくのだ。ランチにふさわしい軽めのスープと3種類のパスタが定番であった。ウエイトレスとして、アルバイトでやとっている大学生の裕子だけが使用人で、あとはすべて高志が取り仕切っている。月曜日は病院も混むので「シ

ャンテ」もことに人が多かった。次々にパスタをゆでる。ケチャップを使ったり、クリームソースを混ぜたり、高志は注文に従って、てきぱきとメニューをこなした。コーヒーは引き立ての豆をドリップで丁寧にいれた。

そのとき、ドアに倒れかかるようにもたれて入ってきた女性がいた。初老の、うすい水色のシフォンのブラウスを着て、クリーム色のスカートをはき、茶系のバックをしっかりと抱えている。彼女は室内をすばやく見回すと、すみのほうにある一人用の椅子に斜めにぐったりとこしかけた。

「いらっしゃいませ」すばやく裕子が声をかける。お絞りとメニューを持っていく。うつむいていた女性はやっと顔を上げると「ありがとう」と低い声で言った。のろのろとメニューをひらく。静脈の浮いた手が頼りなくページをめくる。催促がましく傍にたっている裕子に、バジルのイタリアンパスタとコーヒーを注文した。厨房から高志はその女性の表情に目をやった。くぼんだ頬を涙が幾筋も流れる。拭おうともせずに彼女は身動きもしなかった。涙は膝にこぼれスカートを汚した。肉の削げ落ちた肩が微妙に揺れている。高志は声をかけていいものか、迷ったがとにかく出来上がったパスタを自分で持っていった。

「お待たせしました」テーブルの上に差し出すと、見上げた女性の潤んだ目がまたも数粒の涙を落とした。
「失礼ですが、どうかなさいましたか」差し出がましいとおもったが、他のテーブルの客に聞こえないように彼は小さく声をかけた。
「ごめんなさい、ちょっとしたことがあったもので――もう大丈夫です。みっともないわ。」初めて彼女はハンカチをとりだし、涙を拭いた。彼を見上げて申し訳のようにすこし微笑んだ。
「どうぞ、ごゆっくり、あとでコーヒーをお持ちします」。あまりしつこいのも彼女の神経に触るだろうと彼はそっと傍を離れた。白髪がすこし混じったストレートの髪型と意思の強そうな口元が個性的で忘れがたい美しさがあった。女性はのろのろと、しかし機用にフォークでパスタをまきこんで口に運び、青ざめた表情の割には元気のようで、綺麗に平らげるとコーヒーをおいしそうに飲み、シャキッと首をたて、しっかりとたちあがり、会計を済ませると裕子の挨拶に送られてドアの外へと消えた。それが道子という客に出会った最初だった。
その後、週に一度ぐらい、彼女は店に顔をだし、ランチをとった。明らかに病院通

いの帰りとおもえた。痛々しいほどの細い首、華奢な体が一層小さく頼りなくそれが不思議な美しさをかもし出していた。

他の客の手前、特別に彼女と会話を交わすことはなかったが、いつのまにかランチの常連になって、顔を見れば笑顔で迎えるようになっていった。ふとしたきっかけで彼女は抗がん剤の治療を受けた帰りに寄るのだと話したこともあった。白い顔に一層色がなく透明に消えてしまいそうなほどはかなげな様子は、病気が決して軽いものではないことを示していた。始めて店を訪れたとき彼女の流した涙は、癌の告知をうけ、もはや治療の方法に期待は持てないという宣告をうけた日であったと知った。

夫は病院までは付き添ってくれるのだが、イタリアンの食事が嫌いなので、彼女には店で十分に休んでから帰宅するようにと労わって、夫は一足先に帰るのだということであった。彼女――道子はやっと身体を支えられるほどやつれていた。それでもコーヒーはよほどすきなのか、必ず注文して残すことがなかった。自宅までは歩いて一〇分もかからないところにあるので店では安心してくつろぐことができるのだという。道子はいつもうつむいて低く流れる古い時代の中南米音楽に耳を傾けて、かなりの時間をつぶすことがあった。店の雰囲気が気に入ったのか、帰りたくない理由でもある

のか、道子は一人でぼんやり考え事をしていることが多かった。その雰囲気は、１９世紀フランスの画家、モジリヤーニが描く女性によく似ていると高志は好ましくおもって眺めていた。

「シャンテ」から二、三十メートル離れたところに小さな公園があった。公園といっても欅の大木の木陰に木製のベンチとブランコがあるだけの空き地だったが、程よい木陰は昼下がり、読書をしたり、おしゃべりをしたりする学生や、幼児を連れた若い母親の憩いの場所でもあった。散歩の途中で一休みする高齢の夫婦もよく見かける心地いい空間であった。

三時に店を一旦クローズして、ディナーの用意の買い物がてら、高志が公園の前を通りかかったとき、木立の奥のベンチに腰掛けている道子を見かけた。ふかくうつむいていて一見眠っているようにみえた。

「奥村さん、どうしたんですか」思わず立ち止まり、近づいて声をかけた。道子ははっと顔を上げたが、高志を認めると唇が緩んだ。しかしおもわず二、三歩後ずさりするほど目元は険しかった。

「奥村さん、具合がわるいのですか。家までお送りします。一緒にいきましょう」肩に手をかけた。道子は激しく手を振り解いて彼を見つめた。殺気のようなものを感じて高志は言葉を失った。初めて見る道子の表情だった。

「高志さん、聞いてくださる？つまらない話だけど、一度、誰かに私の話を聞いてほしいと思っていたの、どうしても話したいの、我慢して聞いてくださいな」

高志は道子の強い視線に押されてうなずいた。

「何でも話してください。お聞きします、僕でよかったら」高志はそっと道子のとなりに腰掛けて彼女の方をうかがった。

「時間はとらせないわ、高志さん、私はね、はっきり言うと間違った人生を送ってしまったのよ」

「奥村さんが間違っていただなんて、そんな――」

「私は結婚してから今の今まで主人に守られてきた、家にいて、家事をして、主人の世話をして、主人の顔色をみて、主人に気に入られるように、そんなことばかり考えて生きてきた、それが楽な生き方だったから、それで一生を送ることに疑問を持たないようにしていたから。でもいよいよ人生も終わりになるかもしれない今になってわ

かったの、これが幸福な妻というものなら、私はそんなものはいらない、いまはっきりそういえるんです。人間なんてそんなものではないと思う、たった一回しか生まれてこないというのに、私は主人のためだけで終わってしまった、私に生きる実感なんてなかったのよ。私は一人の男に捕らわれていただけなのよ、主人が私をこんな女にしたのよ」

一気に話した語調の激しさに、高志は言うべき言葉が見つからなかった。気慰めを通り一片に言ったとて何になるだろう。道子の告白ともとれるこれらの言葉は高志にとって唐突であり、衝撃であった。いつも慎ましやかに夫に従っていた彼女の楚々とした姿からは想像さえしていない告白であった。高志は彼女が夫の輝夫と一緒にスーパーで買い物をしている姿を見かけたときのことを思い出した。籠をかかえて夫に向かい、話しかけては言われるままに果物などをいれている彼女の従順な姿からは、想像もできない言葉の数々であった。あれは一体何なのだろう。

「それは平穏な道を歩いてきた人の贅沢な不満と言うものです。御主人があまりにも出来ているからそんな不平が出てくるんです。ひりひりするような生き方が出来なかったからといって御主人のせいにするのはおかしい、人はいろんな生き方のほんの

一部分しか経験できないし、他のほとんどの人生をあきらめてたった一つの道しか選ぶことが出来ないのです。奥村さんの人生は立派だし、一人の男性に尽くしたというだけで、幸せな一生だと思います」

道子は赤く腫れあがった瞼をおさえ、涙の流れるにまかせて高志の手をにぎった。

「そんなありきたりの慰めはほしくない、高志さん、私は生きているという実感がほしかった、自分の意思で歩いてみたかった。いまになっていろいろな事が視えてくるのよ。私の手はこんなに静脈がういて、爪はささくれ立ち、体中崩壊寸前だけど、今だからこそ見えるものがあるのよ、誰かがささやくのよ、頭の隅で、どうして生きなかったのかと。それさえ贅沢だというなら、毎日同じことを繰り返して生きている刑務所の人たちも幸せだと言えるでしょうね。『人形の家』のノラは私だったのよ。」

ほとんど錯乱にちかい道子の激しい口調は高志の月並みな慰めをさえぎって続いた。どんな言葉も詭弁に思えて高志は言葉を失った。「そうだ、そうだ、あなたの人生は借り物であなたは御主人の影法師のような存在でしか無かった。あなたの人生は間違っていた――。」激情に刈られて彼もそういって同調したい衝動にかられた。しかし、抑えた。それは今、決して言ってはいけない言葉であることを瞬時に自覚したので。二

人はしばらく無言で向かい合い、高志は月並みのことしか言えない自分の立場が情けなかった。
「帰ります、ごめんなさい、時間をとらせました」
どれくらい時間が経ったであろう。陽は傾きかけていた。冷気が背中を伝ってながれた。
やがて道子はよろよろと立ち上がった。先ほどまで彼女を覆っていた憑き物のような魔物は消えて、いつもの穏やかな道子に戻っていた。その変貌にまたもや驚いたが、高志はほっとして「自宅まで送ります」といって彼も立ち上がった。しかし高志を振りほどいて道子は薄暮の中をしっかりと歩いていった。見送っている彼に、途中で振り返って丁寧に頭を下げたが、やがては街並みに溶けて見えなくなるまで、高志は少しの間立ち尽くしていた。それが道子と話した最後であった。

一年半まえ

近くの斎場で奥村道子の告別式があると聞いて高志は焼香に出向き、白い花に囲まれて棺に横たわる道子に別れを告げた。公園で会ったとき、激しい言葉を吐露した人

とは思えないような、穏やかで美しい初老の、道子の面差しを見て安心した。道子は、彼女自身、思いもかけずにほとばしり出た本意を胸の内に包み込んで、何事もなかったかのように墓場へと持っていくのだ。その劫火をわが身とともに、焼き尽くすことによって「無」にしようとしている。高志にだけ垣間見せた告白であり、彼も又、誰にも語ることのない秘密を、もはやこの世に存在しない道子と共有することになってしまった。彼もまた、あの時の道子の言葉の数々を、道子と彼女の夫のために、墓場まで持って行ってそれを葬ることになり、決して他言することはないだろう

そして今

一年半がすぎた。安藤高志は紅葉の美しい一日を、山中湖で過ごした。彼の先輩が湖畔でフレンチレストランを経営しているので、休日の時など店を訪ねては雑談したり、メニューの研究をしたりしてくつろいでくるのだった。古い農家を解体したときに譲り受けたという太い梁を天井にはりめぐらせ、山小屋風のシャンデリアをつるし、クラシックな椅子とテーブルが並んでいるその店は、不便な場所にもかかわらず、かなりの固定客があって、いつも常連がたむろして議論に熱中しているような独特の雰

囲気をもった店であった。味の好みは人さまざまで統一することは難しいが、店内の雰囲気の居心地は人によってあまり変わらないので、インテリアを重視するべきだというのが先輩の持論であった。経営のアドバイスなどをうけて、秋の日を湖畔で過ごした。高志にとっては極上の一日であった。

帰り道、須走りの交差点を過ぎたとき、ふと、以前、彼の店の常連客であり、決して忘れることのできない印象を残して去っていった奥村道子の墓苑がこの近くにあることを思い出した。貞淑な妻と信じ切っていた彼女が、亡くなる数日前に見せた変貌は高志の記憶から一生消えることはないだろう。道子の夫が知ったら卒倒しそうな言葉は死の幻影がもたらした一時的な錯乱だったのだろうか。それともあれが彼女の本心で、普段はいつも主婦という仮面をかぶって暮らしていたのだろうか。道子によって彼は人間のもつ多面性を目の当たりに見る思いがした。

しかし彼女は常識的な堅実な女性だったと思いたい。道子が再び現れることはないと知りながら、しばらくの間、店の片隅に腰かけて静かに音楽に聞き入っている彼女の姿を探し求めている自分に気付いて愕然とすることがあった。

日暮れまですこし時間がありそうである。ついでに立ち寄って、無言で二人の秘密

を語り合いたいという殊勝な気持ちになったのは、道子が微笑んで彼を招いている幻を、薄く雲を引いている青空にはっきりと見たからだ。彼は墓地の中に入っていった。

入り口に事務所があり、親戚のものだが、と名乗り、道子の住所と名前を告げ、墓地のある場所を聞いた。中年の事務員は調べるのに手間取っていたが、探し当て、区画と番地を教えてくれた。

彼は事務所の花屋で秋の花を買った。ススキやおみなえし、リンドウなどの組み合わせで、道子の墓前にはふさわしいのではと思った。

花束をかかえ、バケツに水を汲み、高志は道子の墓前へと向かった。

（２０１２年　１２月）